

〔報告〕 第十九回国際ロマンス語学会議

Informe: XIX Congreso Internacional de Lingüística e Filología Románicas

浅香 武和
Takekazu ASAKA

I

1989年9月4日から9日にかけて、スペインガリシアの中心サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学言語学部を本部に、歴史地理学部（ネオクラシック様式の建物1769—1805）で本大会が開催された。この会議は三年ごとに開かれる（1983 Aix-en-Provence, 1986 Trier, 1989 Santiago, 1992 Zürich 予定）が、今回はロマンス語のなかの少数言語地域ガリシアで初めて開催されたこともあり、ヨーロッパ諸国を主に世界三三ヶ国から1,200人あまりの出席者があった。

開会式は大学講堂において、ガリシア州教育庁長官アルフレッド・コンデ臨席のもと、ロマンス語学会会長マックス・プフィスターは、先のエクサンプロバンスではオクシタン研究が開花し、今回は中世から続く巡礼の都市サンティアゴで開催されたことはガリシア語研究の水準を高めるものであると述べ、さらにガリシア語の現況について説明した。最後に、参加者全員は偉大なロマニスト I. ヨルダンに黙禱した。開会式後、会場を大学食堂に移してアペリチフに歓待された。このパーティでは K. バルディングール、G. ストラカ、A. ロンカーリャなどの著名なロマンス語学者たちと話す機会を得た。日本から大高順雄・春木仁孝（大阪大）、菅田茂昭・会津洋（早稲田大）、近松洋男（京都外大）、福本直之（創価大）、竹内孝次（津田塾大）、中村幹郎（鹿児島経済大）、北村一親（名古屋大）、グロータス神父、浅香が参加した。大会運営委員長はサンティアゴ大学言語学部ガリシア語学科のラモン・ロレンソ教授で、『クロニカ・ヘネラルとカスティーリャ』（1975・1977）、『クロニカ・トロイアナ』（1985）等の業績がある。研究部門は十一セッションに分かれ、さらに六つのパネルディスカッション、三つの基調講演があった。研究発表は、各セッション同時に並行して500あまりの発表が行われたため、参加者はそれぞれ関心のある部門に出席した。

基調講演

- 1 G. ヒルティ（チューリッヒ）「ロマンス諸語内におけるガリシア語の位置」
- 2 A. バルバロ（ナポリ）「ロマンス語学の現況と展望」
- 3 C. セグレ（ミラノ）「中世テキスト刊本の方法論」

研究部門

— 理論言語学および共時言語学（116研究発表）

議長 L. レンツイ（パドワ）、司会 G. ロッホ（サンティアゴ）。

このセッションでは「ロマンス諸語における語順」についてのパネルディスカッションがあった。発言者は、

J. ヘルマン (ブタペスト) がラテン語, P. ベニンカ (トレント) が中世ロマンス語, G. サルビ (ブタペスト) がガリシア語とポルトガル語, G. ボソング (ミュンヘン) がカスティーリャ語, E. B. フェレル (カルボニア) がカタロニア語, B. コンベット (ナンシー) がフランス語, G. チンケ (ベネチア) がイタリア語, A. ニクレスク (ウディナ) がルーマニア語。オック語とレト・ロマン語, さらにサルジニア語の発言がなかったのは残念であった。

日本から, Y. 春木: Le “démonstratif de notoriété” en français moderne. の発表があった。

二 語い論および辞書編纂論 (86発表)

議長M. コルテラッオ (パドワ), 司会J. アントニオ・パスクアル (サラマンカ), G. ロック (ナンシー)。日本ロマンス語学会会長Y. 大高: Étymons des mots catalans. の発表が行われた。

三 プラグマティック言語学と社会言語学 (69発表)

議長C. グラシイ (ウィーン), 司会K. ボッホマン (ハレ), G. クレムニッツ (ウィーン)。

四 方言学および言語地理学 (48発表)

議長G. B. ベレグリニ (パドワ), 司会J. J. モンテス (ボゴタ), V. リューズ (エクサンプロバンス)。このセクションの発表で, 統辞論における弱形代名詞のクリティックの問題は関心を呼んだ。

五 歴史文法と言語史 (91発表)

議長Y. マルキエール (パークレー), 司会E. プラスコ (カルボニア), H. ユルゲン・ヴォルフ (ボン)。

このセクションで日本ロマンス語学会副会長S. 菅田: La terza persona singolare del verbo in -T fra le proprietà della lingua sarda. の発表があった。

六 ガリシア語学 (41発表) 後頁を参照。

議長G. ヒルティ (チューリッヒ), 司会I. カストロ (リスボン)。

七 新ロマニア (47発表)

議長ヘルマン・デ・グラナダ (バリャドリール), 司会A. ボレー (バンベルク), T. ラウワ (ケベック・シークーチミ)。このセクションの「新ロマニア」は, アフリカ, アメリカ大陸のスペイン語, ポルトガル語, フランス語を研究発表する部門で, パネルディスカッションが開かれJ. M. ローベ・ブランクがアメリカスペイン語, A. T. デ・カスティーリョがブラジル語, T. ラウワ (カナダフランス語) がそれぞれ発表を行った。

八 命名学 (33発表)

議長D. クレーマー (トリーア), 司会M. アリサ (セビーリャ), J=P シャンボン (ロンシャン)。このセクションでは, 「ロマンス語学にたいする命名学の寄与・その歴史と展望」のパネルディスカッションがあり, H. ユルゲン・ヴォルフ (ボン), J=P シャンボン, P. スウィジュール (ルーヴァン), M. アリサ, R. サンドゥー (ブローニュ=ビャンクール), M. G. アルカモネ (ピサ), A. バディア (バルセロナ) がそれぞれ発言した。

九 中世文献学およびルネッサンス研究

A. テクストクリティックと版 (エディション) について (33発表)

B. 文学史および文学批評 (69発表)

議長J. ルディル (パリ), M. チサンス (リエージュ), J. デ・アゼベド・フェレイラ (ブラガ), V. ベルトラン (バルセロナ), G. エッカー (ヌーシャテル)。

パネルディスカッション「マニユスクリプトの伝統・刊本と異本」

J. ルディル, M. チサンス, A. ロンカーリャ (ローマ), M. E. デ・ジェズス・ゴンサルベス (リスボン), W.

ファン・ホック（ルツェラー）の発言が行われた。

カタロニアの A. C. マスフォロールはセルバンテスにおける狂信的自伝の形式について発表した。また、マドリッド大学の J. トーレス・ゲーラはトゥイ [ミーニョ川岸にあるポルトガルとスペインの国境の町] のカテドラルのマニエスクリプトについて述べた。

十 言語学史およびロマンス語学史 (29発表)

議長 R. ポズナー (オックスフォード), 司会 H=J ニーデルエーエ (トリーア), H. D. パオフラー (ベルリン)。

パネルディスカッション「言語理論とロマンス語学研究の発展についてその影響」 R. ポズナー, D. バッジオーニ (レウニオン), A. ニクレスク (ウディナ), B. シュレーベン=ラング (フランクフルト), P. スウィジェールの発言のあと, M. モーリョ (パリ) によるコメントがあった。

十一 国内および国際調査による研究プログラム報告 (35発表)

議長 G. B. マンカレッラ (レクチェ), 司会 G. ホルトゥス (トリーア), M. サラ (ブカレスト)。

パネルディスカッション「ロマンス言語語地図」について, M. コンティーニと (グルノーブル) O. プロフィーリィの報告があった。この大言語地図はイベリア半島のフィステーラからソビエトのモルダビアに至るポルトガル, スペイン, イタリア, フランス, スイス, ベルギー, ルーマニアのロマンス語地域から918調査地点を設け, 1986年からグルノーブル大学を中心に活動し, ALIR (Atals Lingüístico Románico) の第一巻が動物の呼称について1992年に刊行予定されている。

閉会式: 歴史地理学部の講堂において行われ, 十一セッションの結果報告とロマンス語学会新会長のロベール・マルタンが紹介された。最後に大会運営委員長のラモン・ロレンソは, この大会の重要性を次のように指摘した。「大陸の片隅に一つの国があり, イベリア半島のなかで一つの異なる共同体を示し, 固有の言語と文化をもっている。未だにそれを理解しない人々がいるので, 研究者たちが知るようにコンポステラで本大会が開催されたことは意義があった。」なお, この会議のプロシーディングは1990年末にペドロ・バリエ基金 (La Coruña) から6巻本で公刊が予定されている。(以上, 敬称略)

〔展示〕

世界のロマンス語学研究機関の発行する雑誌 (30種類あまり), および研究者個人が出展した書籍・抜刷の展示。

〔ブックフェア〕

サンティアゴ大学出版会, グレードス出版 (マドリッド), アストゥリアス協会, およびフランス, イタリア, ルーマニア, カタロニア語学の書籍の展示即売。なお, Max Niemeyer 出版からロマンス語学大事典 LRL (Lexikon der Romanistischen Linguistik. 8 Bde.) が刊行中である。

〔文化行事〕

4日(月) ガリシアの伝統的な民族音楽 (カンティーガス) と踊り (アガリモス)。

5日(火) カテドラルでのポタフメィロ (盛儀ミサ)。

オルガンコンサート (エリザベト・シュバルツ)。

6日(水) 小旅行: 観光バス10台でサンティアゴから 100km のリーア・ビーゴへ。リーアを2時間の遊覧。

ル・アカデミア・ガレーガ (ILG-RAG) による『表記・形態の規準』(1982) については政治的になり、それに関して論争しようとする研究発表は認めるわけにはいかない。それはロマンス語学会議のテーマに入らない。なら学問的な制限もなく、それを認めなかったのは学会組織であった。同様に、学問的でないと考えられる他の発表も許可しなかった。さらに、一度発表したもの、またはテキストとして発表されたものは公刊されるものとして考慮しなかった。我々はそれらのテーマについて裁定することができる。」

さて、今回の会議には特にガリシア語学の研究セクションが第六部門に設けられたので、ことに筆者にとり関心は深いものがあった。議長はチューリッヒのG. ヒルティであり、このガリシアのセクションは最もアカデミックな発表が50あまり行われ、進歩的でない研究者にとりかなり関心を誘うセクションであった。しかし、ヒルティ教授の基調講演「ロマンス諸語内におけるガリシア語の位置」は、期待はずれの感があった。現在のガリシア語研究のことに関する知識がかなり欠けている。ラモン・ロレンソ教授も次のように述べている。「講演は大変悪い出きだった。この講演のために一週間招待されたにもかかわらず現在の文献について知らない。ヒルティは理想的な状況はガリシア語で話し、カスティーリャ語で書くことであると断言し、さらにガリシア語は一つの方言であった、と言ってこの講演を結んだが……」

第十一部門の言語地図について報告したい。

フランシスコ・フェルナンデス・レイ (サンティアゴ大学教授、ガリシア語研究所研究員) は ALGa (Atlas Lingüístico de Galicia) の作成メンバーで、第一巻がこの会議で紹介された。フェルナンデス・レイは、「言語地図は言語の現実の姿を定めるため、すなわち fotografar するためである。今回 ALGa を紹介する重要性は、ガリシア語の存在をロマンス語学者たちが知ることである。」と述べている。

この『ガリシア言語地図』第一巻は動詞形態に関するものである。(65頁参照) この言語地図の作成はコンスタンティーノ・ガルシージャ教授とアントン・サンタマリナ研究員による指揮のもと、1974年に共同作業を開始した。この第一巻には上記の二人の教授のほかにロサリオ・アルバレス・ブランコ、マヌエル・ゴンサレス・ガルシージャ、フェルナンデス・レイが携わった。さらに、ガリシア・ポルトガル語学科の卒業生カルメ・エルメーダ、ドロレス・ラガロンが協力した。現在のガリシア語領域から167地点を調査 (ア・コルーニャ49, ルーゴ39, オウレンセ31, ポンテベドラ33, アストゥリアス7, レオン5, サモラ3) して、ガリシア語の動詞形態について430枚の地図を作成し500の注釈を施した。

III

ガリシア語研究所について

Instituto da Lingua Galega (Universidade de Santiago) Praza da Universidade, 4. 15703 Santiago de Compostela, ESPAÑA.

この研究所は、大学臨時法令に鑑み *linguas vernáculas* (その土地の言語) 研究のために1970年の教育法令の庇護により1971年5月に正式に開設された。すでに、この兆しは旧哲学文学部 (現言語学部) のなかにコンスタンティーノ・ガルシージャ教授を中心としたロマンス語学科創設の1966年にあった。この構想には学科の上の研究機関としての機能も計画していた。上記の法令によると、各学科の上にある大学の研究所はガリシアのあらゆるレベルにガリシア語の普及を早急に行う目的と、ガリシア語の日常生活の共時的研究にある。同時に個人の調査研究を奨めた。

現在の組織：所長（コンスタンティーノ・ガルシア）、事務局、図書室、教育局、辞書編集局、方言調査局、文法局、言語管理局（1984新設）。

1. ガリシア語の社会普及のために1970年にロマンス語学科の中核部でガリシア語の教育メソッドの作成が始まった。まず、教科書が刊行され、『ガリシア語1』（1971）、『ガリシア語2』（1972）、『ガリシア語3』（1974）、1はカスティーリャ語で、2と3はガリシア語で著された。この入門書は現在6版をだしている。

2. 教科書を刊行した後、ガリシア語浄化のために1976年からセミナーを開き『ガリシア語の言語規則の統一のための基礎』（1977）の小冊子をだし、この基本案は論議の結果 RAG（リアル・アカデミア・ガレーガ）の協力で『ガリシア語の表記・形態の規準』（1982）が刊行され、ガリシア自治政府に認可された。

3. 『ガリシア語基本語辞典』287pp. Ed. Xerais (1980) 現在5版。この辞書は7歳から10歳の子供を対象に、2000語をとりあげ、それぞれの語の用例とイラストを入れている。ガリシア語で著された最初の辞書である。

4. 標準語試案（1885年頃始まったガリシアのルネッサンスにおける言語の統一運動）から100年を機に、大学管理局により言語管理局を新設し『法令・行政用語集Ⅰ、Ⅱ』（1986）を刊行し、用語の整備を図った。

開設当初からの基本的活動は調査研究にあり、ガリシア語の研究をロマンス語学のなかで高い水準にひきあげた。次の出版、刊行計画がある。

a) 『ガリシア言語地図』の作成。第一巻「動詞形態」（1989）。

b) 『ガリシア語大辞典』の刊行計画。この計画は Verba（言語学部ガリシア語研究年報）の分冊として発刊され、現在も刊行しつつある。

c) 『ガリシア語広辞典』954pp. Ed. Xerais (1986) が刊行された。項目数30000語。増補・改訂版（1989）。さらに、12000語の『中辞典』の計画。

d) 『中世ガリシア語辞典』の刊行計画。この辞典には、『カンティーガ・デ・サンタマリア』、『クロニカ・ヘネラルとカスティーリャ』、『クロニカ・トロイアナ』、『ミラグレス・デ・サンティアゴ』、『ヘネラル・エストリア』の史料を用いている。

e) 『ガリシア語文法』590pp. Ed. Galaxia (1986) の公刊。

f) 『ガリシア＝カスティーリャ語規範辞典』996pp. Ed. Galaxia (1989) の公刊。

REFERENCIAS

Fernández Rei, Francisco: “Contribucións das Organizacións Políticas á Normalización da Lingua Galega (1963-1988).” XIX CILPhR Sept. 1989.

Santamarina, Antón (1989): “Lingua galega, norma e standard”. Lexikon der Romanistischen Linguistik (LRL) Band VI. 414. pp. 1-20.

Lei e Proxecto do Instituto da Lingua Galega (notas de Antón Santamarina, Manuel González G.)

PERIÓDICO

Carballa, Xan: “A oficialidade do gelego polémica no Congreso Lingüística Románica”. A NOSA TERRA, N. 399. 14 de setembro do 1989.

El Correo Gallego:

“Filólogos de todo o mundo participan en Santiago no Congreso de romanistas.” “AGAL acusa á organización do encontro de actitudes antidemocráticas.” 5 de setembro de 1989.

“Lingüistas de todo el mundo, en Compostela”. 6 de setembro de 1989.

“Falade galego, pide desde Xapón. Takekazu Asaka”. Por Xosé Luis Blanco. 12 de setembro de

1989.

La Voz de Galicia :

“El gallego y el francés lenguas oficiales del 19 Congreso de Lingüística y Filología”, 5 de septiembre de 1989.

“El Atlas Lingüístico Románico, una malla de 918 puntos desde Fisterra a Moldavia”. 8 de septiembre 1989.

“Una sobre textos medievales cerró el turno de ponencias en el congreso de romanistas”. “Según Ramón Lorenzo, las ponencias rechazadas adolecían de falta de calidad científica”. 9 de septiembre de 1989.

“Robert Martin presidirá la Sociedad de Lingüística Románica durante tres años.” “Prestigio del gallego y de sus lingüistas.” 10 de septiembre de 1989.